

萬斛の涼味

泉鏡花作

明治四十四年七月

これから種々な讀物に、涼しいと感じた事とか、涼しい場所とか、所謂涼味の事が折々見えるけれども、他人様はそんな事はないのだが、私だけの考へではどうも其の記事を讀むと、涼しさを思ふと同時に直ぐ暑さの方を考へる。丁ど極暑の時に田圃道なぞを歩いてみて、一寸した松蔭に、折柄の風を入れて萬斛の涼を取つたとある、すると同時に先の田圃道の暑さの方を思ひ出す、またアイスクリームを喰べるとあれば、一寸聞きには涼しさうだが、如何にも其人が腕まくりか何かで、釦を脱して扇づかひをして居る様が眼に浮ぶ。

煩いやうだが、灯點し頃青簾の蔭で泡盛の冷したのを飲むといへば、悪い心持ではなし、其人は涼しいかも知れないが、周囲の暑さが思ひやられる。すべてかういふ涼味の談話は涼しいに止めないで、寒

いところまで行つたら却つて涼しさを感じやしなからうか。なにも眞夏の熱い最中に焚火にあたれと言ふやいつな、禪機を得たらしい事を言ふのぢやないが、岐阜提灯の涼味ぐらゐでは、却つて日中の暑さを思ひ出す事になる。

平生の旅嫌ひが夏になると就中嫌ひになつて何處へも出懸けない。ひとつには蠅を恐れること非常なので、何か海濱に遊んで澆刺たる鱸の洗ひが新しいとか何とか言つても、あの蠅のゐる事を聯想すると、直ぐ不愉快になつて了ふ。此の暑い時一番宜いのは寢轉んで旅行記を繙くこと、それも避暑探涼といふのでは感心しない、手取早く言つて了へば膝栗毛を「寢轉んで、日中讀むのに限る、」丁度道中の驛々を一所に歩くやうな心持で、原よし原なんといふ所へ、泊つたり立つたりする。木曾街道になるとなか／＼さびれてゐて、却つて暑さを忘れる事ができる。

酒などを飲んでゐるのを、傍から見れば熱さうだが、あれで本人の身になると左程でもないもので、

大して飲めもしないが酔つてくると暑氣を忘れる。
これは甚だ勝手次第な申分だが、どうもこの涼味と
いふやつ、先づ一遍は暑氣に出會さなければなら
ない。何しろ夏の熱さを忘れて、涼しけりや結構だが、
どうもその旅行といふものゝ、山路の岩の上へ日が
さしたり、砂濱へ照りつけたりしたところは、海の
色まで暑さうで、とんと涼味を感じられない。

近頃さう云ふ人が増えて来たが、涼しいのは江戸
の町で、晩方になつて水を打つと風がつめたくなる、
そこへ灯が点いて下町の夕は何とも言へない好い心
持になる。一寸見ると暑いやうに思はれるが、根岸
か小梅あたりの蚊遣といふものが、中庭の青々した、
垣根に紫陽花の咲いてあるところへ掛つてある景色
といふものは、私はいつかも此の景色を見た事があ
りますが、東京の夏に見る最好的景物だらうと思ふ
ので、勿論屋根船は論外だが、それも冷したビール
か何かに明け放つたところは涼しいやうでも、たと
へ透綾を着て居ようが、景物にでも女がゐてはど
うも暑さうで仕様がな。

子供らしい事を言つて嗤はれるかも知れないが、暑くて寝られない晩などは、水機關を手水鉢へ仕掛けて、あの音を聞きながら睡る。狭苦しい宿屋へ押込められて、谷水の音をきくよりも、平生溪流のきこえないところだけ、一段と面白い。また旅行に限らず、神社佛閣へ詣でると、その境内といふものが何となく神々しく氣が改まるせみか身が緊つて、茂つた中のお宮様なりお寺なりへお参りすると、清々しくなつて来る。

食物でも飲物でも懨冷たいものよりほ、暖かいものの方が、却つて暑を忘れられる。お茶なんども熱いのゝ方がよい。要するに冷すとか涼むとかいふものは、餘計に暑氣を感じて妙でない。

夜分仕事を終つて一寸そこらを歩いて来ようと思つても、これが綿入時分のやうにひっそりとして居られては、なにも悟りすました譯ではないから、當なしに歩くこともできない。夜店をぶら／＼歩いてゐるのは全く夏に限るので、これは江戸に限つて、地方にはない。殊に避暑地なぞへ行つてはさういふ

ものにはぶつゝからない。

水といへば山深いところの谷川なぞなら涼味どころか申分なく寒さを感じられるけれど、海の水、大川の水、灌の水といふと一寸夏は暑いと感ずる。そこへ臨めば涼しいのかも知れないが、これが一寸した田舎道にあつても、左程大きくなくつても、沼とか池とかいふと臆病だからかも知れないが、涼しさを通り越してゾツとするものだ。

【完】